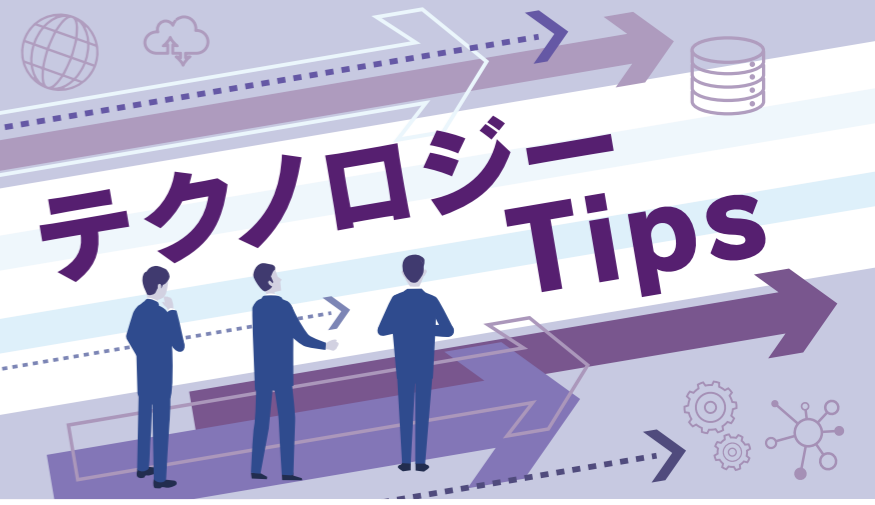




AIの進化が止まりません!

これまで当たり前に使ってきた業務ソフトを置き換える動きも加速しています。

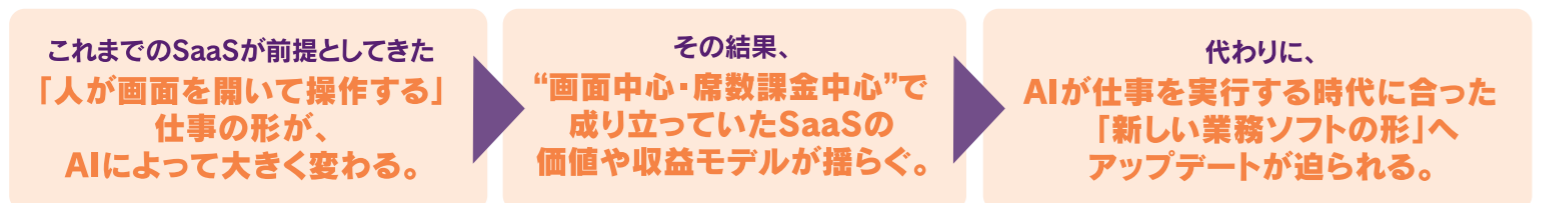
「SaaSの死」思わず目を引く言葉ですね、これはいったい何を意味するのでしょうか?



AIの進化により、業務ソフトの姿も私たちの実務の進め方も大きく変わりつつあります。丁寧に整理し、今後に向けた具体策を検討しましょう。

1. 「SaaSの死」とは、何が“終わる”という話なのか?

「SaaS(サーズ)」は、これまで多くの企業で当たり前になってきたクラウド型のソフトウェアです。会計、勤怠、営業管理、資料作成、問い合わせ管理などを、ブラウザやアプリで使い、月額で利用する形が典型です。一方で、最近の議論で使われる「SaaSの死(SaaS is dead)」は、SaaSそのものがすべてなくなるという断定ではありません。より正確には、次のような意味合いで語られています。



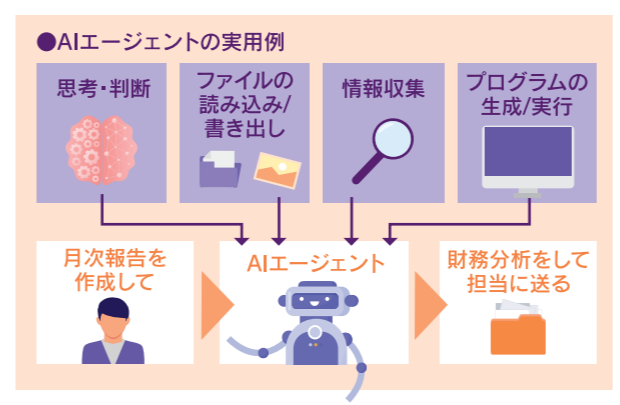
議論の契機は、米Anthropic社が財務分析や資料作成などの実務領域へ進出(Claude Opus 4.6 / Cowork)を発表したことです。これにより、「既存のSaaS市場がAIに代替される」との警戒感が広がり、関連企業の株価下落を招きました。



2. 何が変化を起こしているのか? 主役は「AIエージェント」

今回の変化の中心にあるのは、生成AIそのものというより、AIエージェントと呼ばれる考え方です。AIエージェントは、単に文章を作るだけでなく、目的(例: 月次報告を作る、見積を作る、入金遅れを洗い出す)を伝え、AIが複数の作業を段取りして実行していく“仕事の代理人”のような存在です。ここで重要なのは、AIエージェントは「新しいアプリを増やす」方向ではなく、むしろ逆で、

- いくつかのSaaSを開いて、操作して、データを移して……という手作業を減らし
 - AIが裏側でデータにアクセスし、必要な処理や資料化を進めるとい方向に進みやすい点です。
- メディアで報じられている「財務分析やパワポの自動化」といった例は、まさにこの延長線上にあります。人が“ツールの使い方”を覚えて操作するのではなく、AIに“やりたいこと”を伝え、AIが仕事を進める世界観です。



Column AIエージェントは「AIに仕事を“やらせる”仕組み」

生成AI(ChatGPTなど)は、基本的に「聞いたことに答える」のが得意です。一方、AIエージェントは、答えるだけでなく「目的に向けて段取りを組み、必要な道具を使い、作業を進めて完了まで持っていく」ところまでを狙います。定義としても「ユーザーの代わりに目標を追求し、推論・計画・メモリ等を使ってタスクを完了させるソフトウェア」と整理されています。

3. 「SaaSの死」で変化するポイント

「死」という言葉が強いので誤解されがちですが、論点をしっかり分解してみましょう。企業側(ユーザー)に関係が深い「変化」は、主に次の3点です。

① 画面(GUI)中心の価値が下がる可能性

これまでのSaaSは、使いやすい画面、入力しやすいUI、分かりやすいメニューが強みでした。しかし、AIがSaaSの裏側(APIなど)で操作できるようになると、人が頻りに画面を触らなくなる可能性があります。結果として「画面の作り込み=差別化」という価値が相対的に弱まります。

② 「サブスクリプションモデル(ID課金)」の前提が揺らぐ可能性

多くのSaaSは「1ユーザーいくら」という課金が基本です。ところが、AIが仕事を代行する比率が上がると、「人が何人ログインするか」よりも、「AIがどれだけ処理したか」「どれだけ成果を出したか」がコストの論点になりやすいと言われます。

③ 「記録するだけのSaaS」はリプレイスを含めた検討の必要性が強まる

SaaSには大きく分けて、

- 情報を貯める(記録する)ことが中心のもの
- 作業を回す(実行する)ことが中心のもの

があります。AIエージェント時代には、単なる「記録場所」以上に、「仕事を前に進める力=自動化・提案・実行」が強く求められる、という見方になりつつあります。

4. なぜメディアは「SaaSの死」を取り上げたのか？

多くのメディアは、この論点を「AI企業が業務領域へ踏み込むこと」や、「大手ソフト企業にも影響が及ぶること」、さらに「投資家がどう見ているか」といった角度で整理しているように読み取れます。ポイントは、SaaSが突然「使えなくなる」という話ではなく、評価軸が変わり、勝ち筋が変わるという点です。実際、海外でも「SaaSは死んでいない。市場がよりハイブリッド(AI+SaaS+データ+運用)になっていく」という論調が出ており、過激な見出しは“変化の大きさ”を示すための「インパクト」として使われることが多いです。



最も大切な部分です！

5. 企業にとっての影響「チャンスと注意点」



企業にとって「SaaSの死」論は、恐怖を煽るための話ではなく、業務のやり方・IT投資の考え方を見直す合図と捉えることが大切です。

期待できること

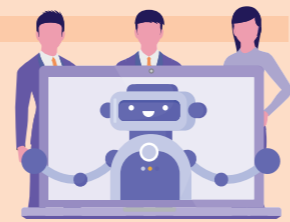
A “アプリ操作の負担”が減り、生産性が上がる

「このSaaSのここを開いて、CSVを出して、別のSaaSに取り込んで…」といった手作業は、現場の隠れたコストです。AIエージェントがここを吸収できると、間接業務の時間が減りやすくなります。



B 小さな会社ほどメリット大！少人数で“高度な運用”が可能になる

今、どの企業も人手不足です。月次管理資料、売上・粗利の要因分解、見積りや提案書作成など、数多くのバックオフィス業務を、少ない人数で回すこととなります。AIが「下準備から指示に応じた作業」を引き受けることで、作業スピードはもちろん意思決定も速くなります。



注意すべきこと (リスク/落とし穴)

A データの散在が“AI活用の壁”になる

AIが賢くても、元データがバラバラ(紙の証憑、Excelが点在、ルール不明、入力品質が不安定)だと、AIは期待通りに働きません。AI時代ほど、実は「データベース整備」「入力ルール」「権限管理」「ログ管理」が重要になります。



B “AIに任せた結果の責任”は会社側に残る

AIは作業を代行できますが、最終的な判断・承認・説明責任は企業側にあります。特に、会計・人事・契約・与信などは、AIの出力をそのまま採用するのではなく、社内のチェック手順を設計する必要があります。

C コスト構造が読みにくくなる可能性

サブスクリプション(ID課金)が中心の時代は予算化しやすい一方、AIの利用が「処理量」「従量」「API利用」などに寄ると、使い方次第でコストが増減しやすくなります。



6. 中小企業が今から取るべきアクションは？

最後に、明日からの実務に落とし込むと、優先順位は次の通りです。

1 データの置き場所と“正”を決める

顧客、商品、案件、請求、在庫など、会社の根幹データの所在と正本(Single Source of Truth)を明確化します。データベースをしっかりと構築することも重要。



2 AIに任せる業務を“3つだけ”決めて試してみる

定例資料のたたき台、問合せ一次回答の下書き、社内検索(規程・手順書)など、小さく始めて効果測定してみましょう。



3 セキュリティと権限管理をしっかりと整える

AIがデータに触れるほど、権限・ログ・情報持ち出しの統制が重要になります。運用ルール(誰が何を許可するか)を決めます。



4 SaaS選定基準を「機能」から「連携・データ・運用」へ移す

これからは「ソフトウェア何が出来るか?どんな機能があるか?」だけでなく、「他とつながるか」「データ活用が改善するか」「運用が回るか」を重視するほうが、AIを上手に活用できます。



参考・出典(編集注記)本稿は、ユーザーご提示の日本経済新聞 電子版の記事(右記リンク)を参考にして要点を整理し、読者向けに編集要約したものです。●「SaaSの死」震源、アンソロピックが新AI 財務分析やパワポ自動化(2026年2月頃) ●Microsoftにも「SaaSの死」の影 売上4割ソフト、株価一人負け(2026年2月頃) ●百家争鳴「SaaSの死」どう見る 日米VC投資家に聞く(2026年2月頃)

最後に、整理します! 「SaaSの死」という言葉は少し刺激的ですが、AIで仕事の進め方が変わり、業務ソフトの役割が見直されていく、と理解しておきましょう。

データを整えて小さく試しながら、AIを少しずつ現場の力にしていくのがAI時代の「最適解」です。

当社がしっかりご提案、導入サポートいたします!

まっ っと 当社にご相談ください!